
PLANETARIUM (前編)

真木 葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

PLANETARIUM (前編)

【Nコード】

N1079K

【作者名】

真木 葵

【あらすじ】

夜毎現れる月下の奇術師、ビッグジュエルを探して彷徨う怪盗。そんな快斗の前にクラスメイト小泉紅子は忠告をしに現れた。

「今日が何の日だか知ってる…？」学校へ行って見れば解ると告げられ怪盗が再びハングライダーの羽を広げると、摩天楼の夜空に無数の流星が姿を現して…（前編/後編になります）

(前書き)

まじっく快斗アニメ化!という情報を得て急遽投稿
話の都合上、オリキャラが一名居ます…。

幾度目とも解らぬ舌打ち、自覚のないウチに劣勢に陥り、凡そ一般人では考えられない速さでその思考回路は緻密な計算を瞬時に行い、逃走経路を図る。普段ろくに使わない頭脳だったが流石IQで示される数字は真偽を問われる程にまで馬鹿高い。行動力も度胸も去る事ながら、その才を補うだけの頭脳の持ち主だからこそ、彼は今こうして月の無い夜を、背に広げたハングライダーという羽で飛びまわっていた。

この大怪盗に挑戦してくる者は少なくない。日本屈指の大財閥から始まり、来日したイングラム公国の女王ですら国の宝をかけてキッドへ挑みかかってきた。流石のキッドもケンカを吹っ掛けられれば逃げるワケにはいかない。意地なのかプライドなのか知らないが、彼はどんな境地にも冷や汗一つ見せずにはポーカーフェイスで切り抜けてきた。

しかし今日と言う今日程、こんなに危なげな日はなかったと彼は胸中で呟いた。普段はキッドに取っては所詮烏合の衆である警察を手玉に取って、華麗なるマジックショーを披露していた物なのだが、まさかゲーム盤の上にジョーカーが二枚も存在していたとは。

おもしれえ…と意気込んだのも束の間、流石に一人は警視總監の息子であり海外でも活躍するホームズフリークの名探偵。そしてもう一人は姿こそただの小学生だったが、実体は東の名探偵。かつてこれ程までに自分を翻弄させた人間はいない。しかもその二人は手を組んでいないとは言え、二人の目的は怪盗タダ一人。

目当ての宝石を一度はこの手中に収めたものの、さすがに二人の手が彼の足元を掠めた為に逃げおおせるハメになってしまった。彼の真の狙いであるビッグジュエルではなかったのも幸いして、キッドは宝石を置いてようやく二人の強靱な追っ手から解放されようとしていた。

ハングライダーで風を操り、どっぴり疲労と安堵を込めた溜息を吐き出すと、視界の中のとある高層ビルの最上階に見知った少女の姿があった。視力には自信があるものの、飛びながらではなかなか確認出来ずに滑空すると、やはりクラスメートの少女だった。

「あいつもかよ…」

今日は随分と皆躍起になってどうしたんだ？と軽口にも似た独り言を呟いて、少女の待つ高層ビルに近寄って羽を縮めた。このまま逃げても良かったのだがそれじゃ怪盗キッドの名が廃る。仕方なしに音もなく屋上に着地すると、自分を待っていたらしき少女の前へと数歩近寄った。

「こんばんはお嬢さん」

あくまで紳士的にポーカーフフェイスで頭を下げて挨拶の言葉をかける。まさに名演技。名探偵の二人に比べればそれ程強力な相手ではなかったがいかなせん“奇妙な魔法”を使ってくるのでその辺は通常の間人相手にするのはワケが違うのだから侮れない。

さてと…彼女の出方を窺っているとしたら違和感を覚えた。何も喋ろうともしない彼女。クラスメートの小泉紅子は、10月の夜の服装にしては些か涼しそうな格好だったが、いつもの“魔女スタイル”ではなかった。常にキッドの前に現れる時は、彼女もまた正体を隠して現れていた筈だった。(とは言っても彼女にとってはそれが本当の自分の姿なのだろうか…)

「最近随分忙しそうじゃない」

「そうでもありませんよ。…まあ確かに私が自ら出した予告状ではありませんし、こちらの都合も少しは考えてみて貰いたいとは思

ますけれどね、でも……」

「“怪盗キッド”は神出鬼没？」

「ええ、そういう事です」

彼女も又、怪盗キッドの正体に気が付いている人間のウチの一人だった。大つぴらにバラそうとはしないし、キッドも普段は話を反らして居るから認めてはいないのだが。けれど確実に怪盗キッド＝黒羽快斗という事は解っていると、キッドも知っていた。

「それで？今宵はどういった御用件で」

紅子の気配から察するに、何かを仕掛けている感じではなかった。勿論彼女は魔女だから気付かれないようにしているのかもしれないが、つたけれど、雰囲気は何処となくいつもの紅子とは違う何かを漂わせていたから油断ならなかった。

一見普通の高校生だったが、いつどうやって魔法を発動させるのか。黒いジーンズに胸元が開いたサマーセータ、首から下げているのは禍々しいまでに派手なネックレス。何よりも彼女の瞳は今日の様な朔の夜を映し出した怪しげな光。さあどう動く。

「そんなに警戒しないで、ただお節介しに来ただけよ」

「…お節介？」

やばい事件が起きる前は彼女は必ず快斗に怪しげな助言を聞かせてみせていた。クラスメートが聞いているかもしれないという教室で人目もはばからずに。彼女の怪しげな魔術の抛り所の邪神だか何だか良く分からないお告げを、快斗は嫌という程聞いていた。

けれど今日はもう仕事も終えて、あとは家に帰ろうという時だ。

あの名探偵二人の事はうまく交わして逃げて来た筈。そして毎回毎回ダミーに引つかかる警察だって、当然追いかけてきてはいない。

「今日が何の日だか知ってる？」

「今日？」

怪盗は頭の中でカレンダーを広げて確認するが、これと言って特別な日ではないとしか言えない。誰かの誕生日か、何かの記念日か、歴史的何かの起きた日なのか。彼女に問われて一瞬頭を傾げたが、答えらしき物が見当たらない。

「知らないでしょうね。貴方、昨日も一昨日も学校サボってるんですもの」

IQこそ高いけれど学校（授業中の態度）は不真面目の代表格の様な快斗だった。当然快斗が何故キッドをやっているかまでは知らない紅子だったが、快斗に言わせてみれば外国のビッグジュエルが日本に来てほんの数日間だけ展示されるとなれば確認せずにはいられない。

例え学校があるのが何が起きようが、彼はキッドになって現れる。今日や昨日の事件こそ、またキッドに挑戦してきた物好きな金持ちの道楽に付き合ったまでだったが、ビッグジュエルを狙いパンドラを見つけ出す事が、快斗にとっては父の敵に通じる物だったからだ。

「真っ直ぐ帰るって言うのなら、学校に寄ってからにしないさ」

いつもの紅子と様子が違う。彼女はそれだけ告げると踵を返す。キッドはその言葉の意味を問いかけようと口を開きかけるが、その瞬間には紅子の姿は一瞬にして消え失せていた。キッドの手品とは違い、彼女は真正正銘の魔女だった。キッドの前に瞬時で現れて瞬時に消えていく。

一体何だっというんだよ、と紅子の言葉に疑問を抱きながらも、

彼女の言葉の“学校”というフレーズに些か引つかかった。けれど今日のこの日と“学校”というフレーズに当てはまる答えが見当たらない。

しかし、彼女の普段の様子とは違うそれを見てしまったのは、寄らずに帰るわけにはいかなかった。

「つたく…」

怪盗はとにかく元の高校生に戻ろうと肩の外套の留め金に手をかけた。キッドの姿で学校に行くワケにはいけないから。しかしそうした快斗の視界の端に、朔の夜を駆け抜ける一筋の光が見えた。

一体何だ？と思いその手を止めてふと上空を見上げた。雲のない夜空から、まるで雨か雪が降り出したのかと思う様な多数の粒が光を帯びて流れていく。

「流星群か」

天体にそれ程興味があるワケではなかったから失念していたが、今日はオリオン座流星群がピークで見れる日だとニュースでやっていった。右から左へ聞き流していたが、確かに今日はその日だったと思いだした。

となると紅子の言った日というのはこの事を指しているのだろうか…そう考えた矢先にふと、彼の脳裏に大切な幼馴染の横顔がよぎった。今か今かと星空を楽しみに眺める青子の姿が、安易に想像できた。

まるで渡り鳥の様に地球にやってきた流星群、彼女が何を願うのか。

「しゃーねえな」

紅子のお節介に半ば感謝すら覚えながら、怪盗は変装を解くのを中断。再び羽を広げて風を読む。学校の方角へ向けて走り出し、そのまま屋上から飛び降りた。流星群を背にして、月のない夜を飛来する。

教室にぼつかりと空席が一つ、それは一昨日からずっとだった。

雑談で賑わうクラスメートが昼休みに席を立つても、紅子は憂鬱そうに窓の外を眺めていた。学校一の美女のその憂い顔すら、傍から眺めている男子生徒の数は数え切れず。しかし有頂天になっていた魔女も今では白い怪盗の虜。…本人あまり自覚ない様だったが、最近ではあまり男を従えて美貌を称えようという態度は全く感じさせなかった。

頬杖ついて空席を眺めていると、ふいに教室を出ていく一人の少女の姿が目に入った。紅子の事を友達だと言う能天気な少女だった。最初こそ黒羽快斗の周りをうるちよるする邪魔な奴だと敵対心剥き出しに見ていたが、最近ではあまりそういう事もなかった。

勿論かといってこつちから仲良く話しかけると言った事はなかったのだが、彼女の持ち前の人の良さに段々惹き付けられつつあるという事も事実だった。

出て行った彼女を待っていたのは一人の少年、顔も名前も解らない所を見る限りでは学年が違う様だった。青子の素振りを見る限りだと恐らく三年生だろうか。クラスの中で青子の友人である恵子は別の友人とお弁当を広げ始めていた。青子の分のスペースも確保している様だったから、直ぐに青子も教室の中へ帰るのだろうと思いきや、その少年と一緒に廊下を歩きだして行ってしまった。

「あの、紅子様…あの一緒にお昼を…」

「ちよつと失礼」

ようやく紅子に話しかける事が出来たといった風な男性陣に興味なさげな顔でそう言い放つと、紅子は教室を出て行った。取り残された男性陣、冷たくあしらわれたというのに去り際の紅子と会話出来た事に喜びを感じている様だった。

颯爽と飛び出していったものの、廊下に青子の姿がない。青子を呼び出した少年もいない。まったくハタ迷惑な子ね…と思いつつも、制服の下に身につけている彼女の魔導具に意識を集中させた。周囲の目は学校一の美女を眺める視線ばかりで、紅子が探知の魔術を使用している事等当然知る由もない。

ここ2、3日、休み時間やお昼休みに彼女を訪ねてくる少年が居た。紅子もそれ程気に留めていた素振りではなかったのだが、まさかあんな子に興味が湧く物珍しい男等、黒羽快斗以外に存在するのだろうかという、そういう目で眺めているだけだった。

友人の恵子にも相談している風ではなかったので大した事ではないだろうと、思いすごしだろうと決めつけていたのだが、どうも女のカンか魔女のカンか。何か軽い胸騒ぎが紅子を襲う。

案の定、青子が少年に連れてこられたのは部室棟。部活等入っていない紅子には無縁の場所だった。そして青子の気配を察知した部屋の前に来ると、そのドアには“天体観測研究部”と書かれていた。中から聞こえてくるのは青子と少年の話声。

紅子はそつとそこから離れて物陰に隠れるように壁に背を預けた。意識を集中させてあの部屋の会話を盗み聞きする為に。相変わらず能天気な彼女も、一応先輩である少年には敬語で話している様子だったが、まるで警戒心等なさそうな感じだった。

しかし岡目八目とは良く言ったもの。青子と話す少年を見ずとも、会話の内容だけで少年の青子への恋心が良く見て取れる。嬉しそうに頬を紅潮させるのを必死にこらえて、彼女をオリオン座流星群観測に誘っている様子だった。

青子は興味ありそうな返事をしつつも、何処か会話は躊躇気味だった。はつきり物言わない彼女も珍しいと思いつつも、恐らく2、3日学校に来ていない誰かさんの事を心配して家に見舞いに行こうとしているのではないかと紅子は考えていた。

少年はあんまり強引な手段に出ようとはしない様子だったので、盗み聞きも中断して先に教室へ戻ろうかと壁から背をはなしたが、とても真剣な声音で少年は青子へ今晚学校に来てほしいと誘っていた。そして大事な話があるから聞いてほしい、と…。

いくら鈍感な貴女でも流石に気づくでしょう、と胸中で彼女に問いかける。しかし少年の気迫に負けたのか青子は「解った」と答えてしまったようだった。と同時に紅子が深い溜息をつく。誘いを断りきれないだけではなく、少年の意図するものがなんなのか解っていない様子だった。頭の中では「この人よほど天体ショーが好きなのね」程度で終わっていきそうにシャレにならない。

お節介は私の仕事じゃないんだけど…そう思いながらもクラスメイト想いの魔女はその場を後にした。

幼馴染に放課後（時刻的には夜）の天体ショーに来ないかと誘いのメールをしようとして手を止めた。

快斗は体調を崩しているワケではないと、学校サボった初日に電話で話したからだった。ちょっと用事があるからといって休んでいる日は、メールをしたところでロクに返ってこないのは良く解っていたからあえて書きかけたメールを全消ししてしまい、今日のお

昼休みにメルアドを交換した一年先輩の天体研究部の部長へと宛先を変えた。

待ち合わせは夜の8時、学校の屋上で部員全員で望遠鏡を広げて皆で観測するというらしい。部員でもなければ天体に詳しくない青子が行ってもいいのだろうかと誘われた最初にそう問いかけたのだが、部長は青子の両手を取って「勿論だとも」と子供の様にはしゃいでいる様子だった。

青子は制服を着替えて簡単に夕食をすませた。父子家庭で育った彼女は、いつもだったならそれなりの一般家庭で出る夕食程度の料理ならお手の物だったのだが、今日は父も不在。キッドが現れるという日は連日連夜泊まりがけで仕事になり、帰ってくる日の方が珍しい位だ。

頂きますも御馳走様も、話相手はリビングのTVだけ。オリオン座流星群の特集をやっているチャンネルもあつたけれど、他は何処も今夜あらわれる世紀の大怪盗を一目見ようと集まった観衆でこつたがえしていた。まるで怪盗はその存在をセンサーショナルなまでにひけらかしてこの都会の空を飛来する、彼の二つ名が示す通り、まさに月下の奇術師だった。

食べ終わった茶碗を洗い、お風呂を済ませる。そのままベッドに倒れこみたかつたけれど、学校へ行くと約束してしまった。確かに流星群は見たいし興味がある。どうせならTVのモニターで見るとは生で見た方が御利益ありそうだと、青子は思っていた。

けれどどうせなら…快斗も一緒に見たかった。誘って貰えた事は嬉しかったけれど、その反面、心の何処かで優先順位を間違えているような気もしてならなかった。そりゃ快斗にメールしたって返事はこないし、電話したって電源は切られてる。家に行つたところを出かけてる。でも何故か「快斗の帰り」を待っていたい、そう思っている自分が居た。

厚手の上着はまだ早かったけど秋の夜、薄着で行っては寒いだろうから、長袖ひざ丈のワンピースにフードのついたパーカーを羽織る。携帯電話と財布だけポケットに入れて玄関を出る。戸締りだけはしっかりとして、そう警察官である父に良く言われて育った。月のない夜だったが街灯が夜道を照らしている。

通いなれた道を小走りで行くと、まだまだ帰宅途中の人と擦れ違ふ。通り過ぎると流星群の話をしている人もちらほら、青子の様にこれから天体ショーを見ようという人たちだったのだろうか。手ぶらで行くのもなあ、そう思って選んだのは学校途中にあるコンビニだった。差し入れという名目でもあり、夕飯を軽めにすませたので皆でお菓子でも食べてわいわいしようという自分の為でもある。

「青子ちゃん」

「あつ、宮木先輩」

コンビニ袋を抱えて学校の正門に近付くと、青子呼び手を振っている少年が一人、青子が来るのを待っている様だった。急いで走り出して門まで来ると、少年は嬉しそうな笑顔を彼女に向けていた。こうして外で待っていてくれたという事は約束の時間を過ぎてしまっていたのかと思ふと「遅れてごめんなさい」と謝るが、時刻はまだ余裕で8時前だった。

「良かった、来てくれて」

「ハイ。あの途中で部員の皆さんにと思って、差し入れ買ってきました」

「本当に！？あー、ごめんね気を使わせちゃって」

「いえ、これくらいは。それに私の分も入ってるので」

青子はえへへと屈託のない笑顔でそう返した。少年もそんな彼女の明るい性格に惹かれたんだろう。まさか本当は告白が目的であるという事は露知らず、そう言った様子に些か残念ではあったが、それでも良かった。

「行く。もう望遠鏡は全部セットしてあるから」

「はい」

そういつて少年は必死に照れをかくして、精一杯の勇気を振り絞って彼女に左手を差し出した。その手を断られるか、恥ずかしがられるか、強引に青子の手を取れなかった少年だったが、青子は少しの間も悩む事無く「ありがとうございます」とお礼を言うとコンビ二袋を少年の手に渡した。

当然“手を繋ぐ”意味合いで差し出した手に来た荷物に笑う仕方がなかった。キョトンとする青子がまた可愛くて仕方がない。それでもまだ言うワケにはいけないから、青子を屋上へと連れて行った。

部員数は10人も満たない程度で、集まっているのは流星群見たさに集まった部員の友人達といった風だった。同じ学年の人も居て、何だかちよつとしたパーティーの様だった。青子を買ってきた差し入れだけでは当然全員に回らなそうだったけれど、皆青子と同じ様に差し入れを買ってきているメンバーだった。

青子を天体ショーに誘った少年、宮木 昴はその優しそうな雰囲気も裏腹に、きちんと部員達を纏めている様だった。夜の学校の屋上の使用許可は安易には下りない。現に今もお菓子を散らかしたり、飲み終わった缶をその辺に置いたままにしている人もいた。きちんと注意をしまわり、部員を仕切る。しっかりした部長という感じで彼はその場のリーダーであった。

「すっごい大きな望遠鏡ですね」

「まだ流星群は見えないけど、覗いてみる？」

「いいんですか？」

「勿論だよ」

正規の部員達は、各々がいい位置取りを考えて計算してそこへ設置している様だった。中にはまだ時間があるからと、別の方角の星を眺めているメンバーもいる。青子は部長である宮木 昴の一際大きな望遠鏡を覗かせて貰った。そこに広がるのは、肉眼では消して見えない鮮やかな星の光…

「うわぁー、素敵」

「青子ちゃんが見ているのは、今丁度この辺でね」

そういつて昴は横に準備してあった星座の本を取り出して青子に見せた。ペンライトで照らされた本は昴が長く愛用しているのがよく解る本。星の位置や名前、所々に彼の走り書きも見える。星の事にあんまり詳しくない青子にでも解る様に説明し出した昴は、本当に楽しそうな表情で星を語っていた。

夜の学校の屋上、普段来る事はない場所で学校の皆とときどきしながら星を見る。昴の説明も専門的な言葉は何一つなく、星の素晴らしさ、星のあり方を青子に話していた。星が好きなんだなぁと青子に思わせる位、彼の声は弾む。

「部長ー、すみませんちょっとコレー、解りますー？」

「んー？」

屋上の少し離れた先で望遠鏡を覗いていた部員らしき女の子が昴を呼ぶと、青子に「ちょっと行ってくるね」と言って駆け寄った。結構頼りにされてるんだなぁと思いつつも、昴が居なくなれば青子

は話し相手がいない。

この場に快斗がいたらどうしただろう。きっと昴の望遠鏡を取り合ってケンカしたかもしれない。でもあの快斗の事だからもしかしたら星に何か興味持たないかもしれない？そんな風に、この場に居ない幼馴染みの事を思いながら、再びレンズに目を落した。

そして吸い込まれそうな暗い宇宙の中、小さいながらも強い光を放つ星に意識が吸い込まれそうになりながら、昼間の昴との会話が脳裏を過ぎった。流星群と一緒に見ようと誘っていた昴が、青子に對して、大事な話があると云っていたのだった。

何だか真剣な面持ちでそう云っていたから、一体何の話だろうかと思いつつも星を見ていてつい忘れてしまっていた。戻ってきたら聞いてみよう、そう決めて、宇宙の神秘を待ち続けた。

程なくして時間は過ぎ、屋上では全員が星空へ釘付けになった。

最初こそ拍手喝采に見舞われたが、まるで地上まで降ってきたような流れ星の群れに青子も胸を躍らせていた。まるでTVやプラネタリウムで見るそれとは大違いで、望遠鏡で覗く宇宙の旅人の光が無数に降ってくるようであった。

少しだけ肌寒くなつてはいたが、この感動が屋上の皆を盛り上げている。代わる代わる望遠鏡のレンズを覗くメンバーだったが、青子は自分の目でその広い空を飛来する星々に夢中になった。

あれだけ賑やかだった屋上も静寂につつまれる。その神秘の天体ショーに溜息すら出そうになる。昴も夢中になってレンズを覗いていた。

まさに奇跡を目の当たりしているかの様で…。

「快斗にも見せてあげたいなあ」

屋上のフェンスに手をかけて、青子はポツリと幼馴染みの名を呼んだ。無意識にと言ったら無意識だったのかもしれない。ただ純粹にこの景色を何処かで快斗も見ていたら良いなあと思った。出来るなら、隣で一緒に見たかったけれど。

そして青子の無意識の独白を聞いてしまった昴は、流星群ではなく青子を見つめていた。雲のない澄んだ空の流星群、好条件でなければ見れないそのショーをどれだけ昴が楽しみにしていたか…。

しかし共に星を見て、想いを伝えようと思っている少女は、何処か遠い目で星を眺め、自分ではない別の少年の名を呟いている。まるで流星に願いをとнаえているかの様だった。

解りきっている事だったけれど、悔しい思いが滲み出る。どうか振り向かせたい。昴はなかなか告げられないその想いを流星に呟いた。

「じゃあ、片付けてくるから青子ちゃんは先に皆と一緒に正門へ行ってて」

「解りました」

大きな望遠鏡を解体して、天文部のメンバーは機材を部室へと運んでいった。青子も手伝いをもってたのだが昴に丁重に断られた。誘ったのは自分だしこれは部員の仕事だから気にしないでと。

青子も高そうな望遠鏡に万が一の事があつてはいけなないと思い、そのまま屋上に残った。お祭りの終わった屋上では、冷たい風が少しだけ頬を冷やしていく。

昴には正門に言っている様に言われたけれど、青子は屋上で再び夜空を見つめた。ここで皆と見たシーンがあまりにも迫力があり、余韻にひたっていたのだ。ただ一つ残念なのはやっぱり大事な幼馴染みも一緒に見たかったという後悔だけ。あんまり毎日一緒にいるものだから、たとえ2〜3日と言えど逢っていなければ心配になる。

心配なだけ…？

ふと誰かから問いかけられたかのような感覚に陥った。しかし屋上には誰も居ない。じゃあ誰だろう？

もしかして、もう一人の自分？ そうだとしたら何て答えればいいのかだろうか。幼馴染みを心配するのは極当然の事。

けど何だか胸の中に靄がかかっていた。昴と一緒に居て、優しい昴の声を聞いて、時折他の人に呼ばれて自分の隣からいなくなっても戻ってきてくれるこの感じ。

「逢いたいよ」

フェンスをぐっと握り締めた。何だか自分でも解らないうちに、悲しみが粒となって頬を伝う。消え入りそうな声で、青子は願う。逢いたい、ただそれだけを。

「ん…誰…？」

何処からか風によって彼女を優しくに見つめる視線を感じた。確かに感じた。青子は服の袖で頬の涙を拭くと辺りを見回した。とは

言うものの満足な明かりもなく、風に聞こえるのは校庭を歩く屋上に居たメンバーの話し声とあたりの木々が擦れ合う音。

「おーい、青子ちゃん」

「え…?」

ふいに背後から青子を呼ぶのは、昴だった。荷物を背負って屋上の入り口に立っている。

さっきの視線は彼だったのかと思いきや、そうじゃないような気もしてならない。

「どうしたの?」

「い、いえ」

青子の様子が気になったのか、昴は小走りで彼女に駆け寄った。何かあったの?と優しく顔を覗き込む姿は本当に青子の事を心配している様だった。

「何でもないです。青子の勘違いだったみたい」

「そ、そう…?」

何でもないならいいけど…。と昴も胸を撫で下ろした。

「今日は本当にありがとございました」

「いやいや、無理に誘っちゃってこっちこそゴメンね」

「そんな事ないです。やっぱりTVとかで見るとより凄く綺麗です、望遠鏡から覗いた世界も。こんなに遠く離れているのに、はっきりと見える。流れ星なんて、子供の頃にいくら待っても全然見れなかったから」

「確かに、そうだね」

昴は星を観察しながら色んな事をメモしている様子だった。天体観測部のメンバーもまた、勉強の為にレンズを覗いていた。青子は星の事はよく解らなかつたから、そんなお子様な感想しか言えないけど…と昴に照れてみせたが、そんな真っ直ぐな彼女の心に昴は惹かれていた。

「ねえ青子ちゃん」

「はい」

「あのね、聞いてくれるかな。僕の話…」

そう、青子も気になっていたのが昴の言う大事な話という奴だった。決して忘れていたワケではなかつたのだが、あまりに屋上の雰囲気が流星群一択だったので、こちらから聞き出せる雰囲気ではなかつた。

「何ですか？」

彼女はいつもの笑顔で昴の言葉を待った。その表情から察するに昴が何を言わんとしているのかは、全く連想していない様子だった。真剣な瞳で青子を見つめている昴ですら、出鼻をくじかれる思いだ。いつも明るくて、笑顔で、学年が違えど彼女の事は良く知っている。クラスメートの黒羽快斗と幼馴染み以上の関係だという噂はなかつたけれど、彼女の事を見ていれば彼女が誰の事を想っているのか等は一目瞭然だった。

伝えたところで意味はなく、彼女を困らせるだけだという確信だけがあつた。大きな太陽の様に輝く彼女の笑みを曇らせたくはなかつたのだが、想いはただただ募るばかり。

地球にやってくる流星群に祈りを込めて、告白しようと誓った。

どうしても彼女の事が好きだから。

その為に、今日ここへ彼女を誘い出したのだった。

「僕、は…」

大きく胸で呼吸をした。

心臓がやたら大きい音を立てて自分を捲くし立てている。

「青子ちゃんの事が好きなんだ」

二人の間を夜風がすり抜けた。青子の少し癖のある髪が頬にあたる。ちゃんと耳に届いたけれど、青子は驚いて「え…？」と聞き返してしまった。もしかして自分の聞き間違いだろうか…、言われる等と思ってもいなかった言葉に、青子は動揺どころかキョトンとした表情で鼻を見ていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1079k/>

PLANETARIUM （前編）

2010年10月15日22時33分発行